

国立科学博物館における活動報告

窪寺 恒己 国立科学博物館 コレクションディレクター
高尾 敏史 国立科学博物館 連携協力課長

0. はじめに

このたびの震災以降の文化財等レスキュー活動は、現地の博物館関係者はもちろんのこと、博物館を取り巻く地元住民の方々、震災復興のために現地に労を惜しまず通われた関係者の方々などすべての方々の協力なくしては叶わなかったものである。地域によって、あるいは施設によって、仮の博物館施設として活動を再開したところもあるが、博物館等文化教育施設の復旧に向けた展望が見えない例も少なくなく、引き続き復興に向けた活動を緩めることなく続けていくことが求められている。

東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会（以下、「救援委員会」）を中心とした標本レスキュー活動に関しても引き続き現地の要望を可能な限り実現していくための活動が重要であり、本救援委員会の経験を今後にいかにつなげていくのかについて個々の関係者、組織など様々なレベルで経験、知識、情報などを共有していくことが必要である。

一方、被災地のみならず日本社会そのものの充実発展のためにも、この難局を乗り越えることをひとつの契機として、今回の震災復興を前向きにとらえた新たな展開へと踏み込んでいく必要がある。

このような観点から、本報告では平成 24 年度における国立科学博物館を中心とした活動の総括を行うものである。

1. 被災自然史系標本レスキュー活動について

国立科学博物館では震災後、陸前高田市立博物館の古生物学資料及び植物さく葉標本のレスキューと昆虫標本箱の供与を行った。また、旧陸前高田市海と貝のミュージアムのツチクジラ剥製標本のレスキュー、山田町立鯨と海の科学館の海藻標本のレスキュー、石巻文化センターの人骨等の標本レスキュー等も行った。これらのレスキュー活動を通じて被災標本類の洗浄・修復作業は平成 23 年度中にほ

ぼ終了し、岩手県立博物館などで収蔵保管の可能な標本は返送した。しかし、被災地の状況で未だ返却できない「ツチクジラ剥製標本」や「人骨等の標本」、「押し葉標本」などは、現地で引き取りができるまで、当館で保存することにした。

平成 24 年度は、下記の 4 項目の事案につきレスキュー活動を実施した。

1) 陸前高田市立博物館被災標本の現地における復旧支援
当館研究員が可能な範囲で現地に赴き、被災標本（主に化石標本）の洗浄、同定、流失した標本台帳等の復元作業の支援を行った。

2) 陸前高田市立博物館の魚類標本レスキュー支援
岩手県立博物館に一時保管されている陸前高田市立博物館の被災魚類標本を当館研究員、魚類学会会員等が岩手県立博物館に赴き、整理・同定を行い新しい標本瓶に移し替え、標本ラベル作成などの支援を行った。

3) 山田町立鯨と海の科学館海藻標本のレスキュー補修後の保管

震災直後に山田町が自力で救出し、平成 23 年度に岩手県立博物館へ管理を委託された約 1 万点の押し葉標本と約 2400 本の液浸標本は、平成 24 年度も引き続き岩手県立博物館が保存・管理しており、これについては国立科学博物館は補修後に発生するカビの除去についての技術提供にとどまった。それとは別に国立科学博物館が平成 23 年 6 月 28 日に山田町職員との協力で瓦礫場から発掘・回収し国立科学博物館で修復した約 700 点の押し葉標本については、平成 24 年も引き続き保管を行った。また、岩手県立博物館で保管されている標本のために、日本藻類学会の有志が保管箱約 50 個を寄贈し、今年度中に納品されるので、今後それを利用した整理・管理に関して、岩手県立博物館への協力を行いたいと考えている。

4) 旧陸前高田市海と貝のミュージアムツチクジラ剥製標本の追加補修と保管

当該標本の緊急レスキュー、補修作業のための標本移動、標本の基本的な補修については、陸前高田市、遠野市立博物館、岩手県立博物館などの協力を得て主として国立科学博物館筑波研究施設で平成 23 年度中に作業を行った。平成 24 年度には、経時的に進んだ標本の材質の老朽化による損傷部分の追加的な補修作業、防カビ処理などを行った。また同標本は、陸前高田市において展示（あるいは収蔵）施設が再建されるまでの間、国立科学博物館で保管の要請を受けており、国立科学博物館の収蔵環境の整備を進めている。これに関しては、同標本の陸前高田市復帰のための準備を加速し、一刻も早く標本が里帰りでき、復興のシンボルとして人々の心の支えとしての機能を発揮できるような状況を実現できるよう内外に強くアピールしていく必要がある。

2. 国立科学博物館震災復興・コラボミュージアム等の活動成果

国立科学博物館では、平成 18 年から地域の博物館への支援並びに地域の自然科学の振興を図るため、国立科学博物館と全国各地の博物館や教育施設が連携して博物館活動を行う「科博・コラボミュージアム」を行っている。このノウハウを生かし、今回の震災に伴い、被災地である博物館等との連携により「国立科学博物館震災復興・コラボミュージアム」を企画し、実施している。

この事業は、国立科学博物館の賛助会費及び三菱商事震災復興支援財団からの助成金により運営されており、国立科学博物館以外に全国の自然史系博物館や大学の関係者にも協力を得て実施されている。

平成 24 年度は、岩手県内 7 箇所（久慈琥珀博物館、陸前高田市立博物館（米崎町コミュニティーセンター）、遠野市立博物館、岩手県立博物館、大船渡市立博物館、一ノ関市立芦東山記念館、岩手県立水産科学館）の博物館等において、アロサウルスの実物全身骨格標本や国立科学博物館が実施した標本レスキュー活動に関するパネル展示を中心とした展覧会、関連するテーマの講演会や体験教室を開催し、延べ 25,000 人（平成 25 年 2 月現在）を超える来場者があった。

平成 25 年度以降も福島県、宮城県の博物館等での実施を予定しており、被災地を中心とした人々に博物館へ足を

運んでいただく機会を提供することとしている。

平成 24 年度の活動において、展覧会・講演会等の博物館活動が関係者間の連携により実施できたことは、参加された現地の人々にとって復興の足音となったばかりでなく、関係者にとっての励みになったとの声も聞かれ、被災文化財等レスキュー活動を含めた博物館活動全般を俯瞰した活動支援の重要性が確認できた。

また、各展覧会・講演会では被災標本のレスキュー活動についてのパネル展示などを行うとともに、研究者による展示標本の解説や三陸に因んだトークを行ったところであるが、被災地での博物館活動の展開は、各地域の方々に対する博物館活動に対する理解の深化を図るうえでも有効になったと思われる。

なおこれらの活動は、現地博物館関係者のみならず全国レベルでのネットワーク拡大強化に有為に働いたと考えられる。

今後は、救援委員会を中心として行われた標本レスキュー活動を中核として、博物館活動全体に対する総合的な支援をしていくことが必要であり、今後の復興に向けた継続的な体制構築が求められる。

3. 救援活動参加による成果と課題

今回の救援委員会の活動において、文化財等の「等」の中には、自然史標本資料等が含まれることが明確化されたことにより、自然史系博物館関係者の活動の裏付けとなったことは、今後の救援活動だけでなく関係組織間の連携協力に向けた大きな成果であると考えられる。

自然史系・科学系の標本資料については、比較的大規模なものが多く、それらの救援事業には、人員並びに経費が必要となるが、救援事業として経費的な措置がなされたことも活動の活発化に良い影響があったと考えられる。今後、自然史系博物館関係者のみならず博物館活動を取り巻く関係者間の理解の深化やネットワーク形成を促進することが期待されるが、地域別に自然史系・科学系博物館や自然史系を担当する学芸員等の所在情報などが十分に共有されていない中で、今回の活動を踏まえたネットワークや組織の在り方についてさらなる検証が必要であると考えられる。

最後に、救援委員会をご担当いただいた事務局、標本資料のレスキュー活動に関わられた関係者をはじめとする多くの方々に対して、そのご努力に感謝申し上げます。



国立科学博物館筑波研究施設で保管されるソチクジラ剥製標本



アロサウルスの実物全身骨格標本と子どもたち



国立科学博物館が行った標本レスキュー活動パネル展示の様子